

28. Skull Scan— ^{99m}Tc -EHDP Brain Scan—の

有効性

○小林 真 前田 敏男
 伊藤 和夫 利波 紀久
 久田 欣一
 (金大・核医学)

最近骨スキャン用剤のテクネシウムリシン酸化合物が脳硬塞部位に ^{99m}Tc -pertechnetate に比し著明に集積するため脳硬塞と脳腫瘍の鑑別に有用であるとの報告がなされているが、我々は脳血管障害の疑われる患者 23 例に 1—7 日間の試行間隔を置いて通算 29 回 ^{99m}Tc -pertechnetate による脳スキャン（以下 Brain scan）に続いて ^{99m}Tc -diphosphonate により脳スキャン（以下 Skull scan）を施行した。方法は ^{99m}Tc -pertechnetate 及び ^{99m}Tc -diphosphonate 各 10—15 mCi 静注後 2—4 時間後に前後左右 4 方向よりシンチカメラにて撮像した。判定は Brain scan, Skull scan について異常 RI 部位と正常大脳半球部の濃度差を肉眼的に 5 段階に分類し、当教室員 5 名全員一致をもってなされた。結果は以下の通りであった。濃度差が Skull > Brain であったのは 21 例 (Brain, Skull, Scan いずれかで陽性であった症例) 中 14 例 (67%) Skull = Brain, 7 例 (33%), Skull > Brain の症例は認めなかった。陽性率は Brain Scan では 29 例中 18 例 (63%), Skull scan では 29 例中 21 例 (72%) であった。

以上脳血管障害に対して Brain Scan, Skull Scan を同時期に施行し両者の検出率と濃度について検討し、Skull scan が脳血管障害検出に Brain scan よりまさっていた事を認めた。更に脳血管障害とその他の疾患の鑑別に役立つ可能性を示した。

29. 子宮頸癌のレノグラム

牧野 宣一 大島 統男
 田中 良明 小幡 康範
 斎藤 宏
 (名大・放)

当科では、子宮頸癌の治療にあたって、照射前に renogram を施行し、照射の効果判定、並びに患者の経過観察に役立てている。Follow up の期間が短かいので充分なことはいえないが、ある程度の結論を得たので報告する。Renogram を施行した症例は全部で 91 例で、うち分けは I 期 16 例、II 期 31 例、III 期 32 例、IV 期 12 例である。III, IV 期と病期が進むにつれて、renogram は正常型は減少し、obstructive 型、non functional 型といった異常型が増加し、かつ死亡率も高くなる。これを一時治ゆの得られた 85 例についてのみ検討すると、特に III 期、IV 期において renogram の異常型を示すものが多くなり、かつ再発率が高くなる。又、左右別に検討すると、III 期において右側の renogram 异常を示すものが多い。

Renogram の型を照射による影響により、3 群に分類した。第 1 群は、照射前に正常型を示すものの 55 例で、このうち 42 例が照射後も正常型を示し病気の再発も認めない。第 2 群は照射により renogram が改善を示した群である。即ち照射前に異常型を示した 12 例は、照射後 6 例が正常型となっている。第 3 群は照射により renogram が更に悪化した群であり、照射前異常型を示した 12 例中、照射後更に 5 例が悪化した。

以上の様に renogram は子宮頸癌の放射線治療において、その経過観察に有効な検査法である。

30. 脾シンチグラム 380 例の検討

加藤 敏光 仙田 宏平
 今枝 孟義
 (岐大・放)

過去 8 年間に施行した脾シンチ 379 例について若干の検討を行ったので報告する。

全例を描画法から分類すると、²⁰³Hg-MHP 赤血球処理法が 330 例と最も多く、その他 ^{113m}In-コロイド法 21 例、¹³¹I- または ^{99m}Tc-MIAA 法 11 例、⁵¹Cr- 赤血球熱処理法 9 例、^{99m}Tc- スズコロイド法 8 例であった。MHP 法は Korst らの術式に準じて行い、本法を小児 15 例にも用いた理由は本法が脾を常に最もよく描画でき、また続いて腎を描画する臨床的有用性に因る。次に、臨床診断または組織診断の確定している小児と奇形を除く MHP 法施行患者 292 例について、脾の形、大きさ、内部構造など形態的所見並びに肝影の出現程度から推定した老齢赤血球処理能としての脾機能を疾患別に比較検討した。正側面から見た形は正常者 (40 例) にても比較的多様であった。左側面での長径は、正常者 9.7 ± 1.4 cm であったのに比べ、うっ血性脾腫 (91 例) 特にバンチ氏症候群 (12 例) が 17.6 ± 3.3 cm と最も大きく、次に白血病 (26 例) の 15.8 ± 5.5 cm であった。内部構造として、悪性リンパ腫 (11 例) の約半数で単発または多発の欠損像を認めたが、所謂 patchy defect は、RI 投与量が少ないためか、白血病以外特にうっ血性脾腫の一部にも軽度に認められた。脾機能は、バンチ氏症候群、肝硬変症 (64 例) などうっ血性脾腫だけでなく、球状赤血球症 (4 例)、血小板減少性紫斑病 (12 例) でも高く、また慢性肝炎 (43 例) あるいはその他ある種の疾患でもしばしば非常に高い例を認めた。

31. 肝スキャン上における脾腫像の診断的意義について

角原 紀義
 (岩手医大・放)
 油野 民雄 分校 久志
 利波 紀久 久田 欣一
 (金大・核医学)

肝スキャン約 1300 例 (昨年度) 中、splenomegaly (後面像で長径 13 cm 以上) を来たした、44 例中 confirm した 30 例について疾患別の検討を

加えた。方法は ^{99m}Tc- スズコロイド 4 mCi、静注後前面、後面、側面、と 3 方向を取った。結果として肝硬変 17 例 CML 5 例、meta 5 例その他 3 例であった。又 CML は 20 cm 以上がほとんど肝硬変は 20 cm を越えない傾向にあると思われる。又肝腫大を合併したものでは CML が全例肝硬変では 2 例だけであった、splenomegaly を来たした肝硬変では典型的な pattern (右葉が atrophy で左葉の swelling) で悪化像の肝硬変であると考えられる。又、Liver と Spleen の activity の相関関係も調べてみると肝硬変の 60% が Liver < Spleen となっている。以上 Splenomegaly を来たし Liver との、activity や hepatomegaly (肝の大きさ) の 3 者を総合的に判定すれば肝硬変、慢性骨髓性白血病の診断は容易で有用な指標だと考える。

32. 膵シンチ所見 (5), 部分欠損像

桜井 邦輝 木戸長一郎
 松尾 孝 三原 修
 有吉 寛
 (愛知県がんセンター放診)

膵シンチグラム上、膵の一部に欠損が見られ、診断が確実な症例 35 例について調査した。部分欠損像を呈した 35 例中 24 例 (69%) は癌症例であった。

頭部全体の欠損は 2 例に見られ、1 例は、乳頭部癌、他は頭部膿瘍であった。乳頭部附近の欠損は 3 例に見られ、3 例とも乳頭部癌であった。頭部下半の欠損は 2 例に見られ、2 例共鈎部癌であった。体部欠損は 1 例に見られ、主膵管が断裂されていない体部癌であった。体尾部の欠損は 21 例に見られ 15 例が膵癌、6 例が膵炎であったが、膵炎の症例は、全体に描出が淡くなっているものの、頭部のみ、見える程度に描出されたものである。

尾部欠損は 8 例に見られ、尾部癌 3 例、膵炎 2 例、尾部の位置異常 2 例、膵尾切除例 1 例であつ